

日本・ドミニカ共和国両国における日本伝統文化の 受容について: 文楽『曾根崎心中』の受容を例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笠井, 津加佐, 雄谷 ソニア, 啓子, 吉田, 千里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32795

日本・ドミニカ共和国両国における日本伝統文化の 受容について — 文楽『曾根崎心中』の受容を例に —

人間社会環境研究科 客員研究員

笠井 津加佐

金沢大学 非常勤講師

雄谷ソニア啓子

四條畷中学校

吉田 千里

要旨

本稿は、日本・ドミニカ共和国両国における日本伝統文化の受容実態を、調査協力者の感想報告を分析・考察することから明らかにしようと試みた研究ノートである。取り上げた作品は、2002年ブラジル・メキシコ公演で、好評を博した文楽『曾根崎心中』「天満屋の段」である。

調査参加者は、国内、ならびにドミニカ共和国とも10名であった。今回の調査において、調査参加者は、作品内容の梗概を読んだのち、パーソナル・コンピュータで再生されたDVDによって30分程度の作品鑑賞を行い、その感想を5分程度で報告した。

分析手法としては、言語化されたデータを、感想が最も顕著に表れると考えられる「形容詞的述語部分（形容詞も動詞も含まれる）」を中心に分類、分析し、受容の傾向を探る方法をとった。報告から抽出された「形容詞的述語部分」は、受容者の受容様態がより明確になるよう、KJ法によってグループ化した。そして、分析の中心は、述語部分が何を評価しているのかといった点を分析者が文脈に沿って解釈することであった。

その結果、国内の調査参加者は、作品内容に関して肯定的な受容を行っていることが多く、自己の経験と重ね合わせて鑑賞していることが多いことがわかった。否定的な受容は、浄瑠璃に関する部分や演出に関する部分に見られるような、文楽を聞く習慣の希薄さや、「縁の下」のイメージの変化、火打ち石で車戸の音を紛らすなどのお芝居の趣向を知らないなどの原因が窺われた。

一方、ドミニカ共和国では、肯定的な受容は、「人形」や「演出」といった目に見える部分に関することが多くみられたが、視覚を通して作品の内容を理解して肯定的に受容している場合もあった。否定的な受容は、言葉の壁による言語部分の理解が困難であることや、「人形遣いが目に見える」といった上演方法の慣習などが影響する部分に見られた。

これらのことから、両国間の受容の差異について以下のように一応の見通しを述べる。

言葉そのものの面白さを理解できるか否かの問題や、目に見える人形遣いの存在など文化的慣習に関わる点には、両国間においてその受容に差異がみられる。しかしながら、人形が表現する物語の面白さや、人情の機微を鑑賞することや、浄瑠璃を聞き取ることの困難さや退屈さにはその受容に共通する点が考えられる。

Concerning Acceptance of Japanese Traditional Culture in both Japan and the Dominican Republic : In the case of the Bunraku Play, “Sonezaki-Shinjū”

KASAI Tsukasa, OYA Sonia Keiko, YOSHIDA Chisato

Abstract

This paper aims to clarify how people in Japan and the Dominican Republic accept the Bunraku play, “Sonezaki-Shinjū”, when they appreciate it.

Firstly, we conducted surveys in Japan and the Dominican Republic. In the surveys, participants were requested to appreciate “Tenmaya no dan”, Act 2 of “Sonezaki-Shinjū”, on DVD, and then to tell about how they felt about it.

Data were analyzed mainly on parts which are used as a predicate with the function of adjective.

The results of the analysis are follows: similarities between Japanese and people in the Dominican Republic are that they had difficulty in understanding “jōruri” and the music and that they were moved by the tragedy that puppets represented. On the other hand, differences between the two countries are that most Japanese told about the fun of contents related to their experiences, their thought and so on, and most of people in the Dominican Republic told about the motion and representation of puppets. Part of the reason for this was a language barrier.

序

文楽が世界無形文化遺産として、その存在を世界に認められて10年目を迎える¹⁾。海外における文楽公演も回を重ね²⁾、その評価も定着してきた感がある³⁾が、どのような形で定着してきたのかについて、日本・ドミニカ共和国両国における受容の実態を調査し、「作品に感動しました」と述べる人々の感動の実態に接近を試みたい。取り上げる作品は、国内でも人気演目の一つであり、海外公演において初期から演目として選ばれることが多かった文楽『曾根崎心中』である。

1. 調査

1.1 調査目的

文楽は、2002年、初のブラジル・メキシコ公演

において好評を博した⁴⁾。当初、太陽に輝くラテン世界での「心中もの」の受容に対しては懸念や危惧があった⁵⁾が、好意的に受容され、かなりの観客動員であった様子が、新聞記事などで確認される⁶⁾。感覚的には対照的にイメージされることの多い世界においても、人間の根源的な次元での共通項が、人々を感動に導いたのではないかと推測される。

本稿が調査対象国として取り上げたドミニカ共和国は、上記ラテン諸国の一つであり、関係者が危惧したように、隠微な心中もの⁷⁾の世界とは対照的なイメージの国である。かつドミニカ共和国は、日本から遠く離れてはいるが、ブラジル同様に日本人が移り住んだ国であるという類似要因がある⁸⁾。その後帰国した人々も多かったが、ドミニカ共和国における日本人のイメージそのものは

良好⁹⁾であり、現在も少なからず日本人が居住している¹⁰⁾。

これらを踏まえて考えると、ドミニカ共和国での日本の文化紹介の様相は、日本からの移住者の数や移住期間の長さから、ブラジル¹¹⁾など長期にわたり移住者が見られ定着した国とは異なると推測されるが、ドミニカ共和国での両国の人びとの関係が友好的であることなどから、日本文化の紹介が行われていることも推測される。

筆者らは、今回の調査により、日本国内とドミニカ共和国における日本の伝統文化受容に差異があるのか、また、差異があるのなら、どこにどのような差異があるのかを明らかにすることによって、伝統文化受容そのものの様相の一端を明らかにできると仮説をたてた。

1.2 調査方法

調査参加者：調査参加者は、文楽を専門に研究した経験がない日本人学生10名（平均年齢21.60歳，SD1.20，男女比7対3），日本の伝統文化に触れた経験が乏しい、もしくはないドミニカ共和国居住者10名（平均年齢42.40歳，SD10.02，男女比4対6）であった。

調査手続き：調査参加者は、まず、作品の梗概を読むように教示され、さらに、調査手続きについて教示された。調査参加者は、梗概を読み終えたのちラップトップ・パーソナル・コンピュータ（50SL）で再生された映像・文楽『曾根崎心中』天満屋の段を鑑賞した。その後、5分間程度で、作品を見て面白かったところと面白くなかったところについて、それぞれの場所と理由を話すよう求められた。ドミニカ共和国での調査では、遠隔地であったことからパソコンに感想を入力するよう求められた。日本、ドミニカ共和国ともに、調査に先立ち行った教示は以下のとおりであった。「まず、作品の梗概をお読みください。（調査参加者が梗概を読み終えたことを確認してから）鑑賞が終わったら、映像の中で面白かった部分についてまず、5分程度で話してください。（ドミニカ共和国では、「話すようにパソコンに入力してく

ださい」と変更した。以下、「話してください」の部分に関しては同じ）どこがどのように、なぜ面白かったのか思いつくままに話してください。次に、面白かったところと同じように、面白くなかったところについて話してください。どこがどのように、なぜ面白くなかったのか思いつくままに話してください。うまく話そうとまとめたりしないで、心に思い出すままに自由に話してください。また、鑑賞途中、梗概によって内容を確認してもかまいません。また、面白かったことをメモに書いておいてもかまいません。」（国内配布梗概資料は、笠井が平成22年度提出学位論文中に掲載した（pp.159-160）。ドミニカ共和国配布資料は、Appendix1,2を参照）。

使用映像：文楽『曾根崎心中』録画テープ（2000年3月5日放送pm3:00～4:45，NHK教育TV）。調査には、「天満屋の段」部分をデジタル化したもの（mpg2形式720×480ドット）を使用した。

2. 調査結果

調査報告の抄録をAppendix 3，ならびに4として添付した。分析の着目点を、報告者の感想が直截にあらわれるところとして形容詞的述語部分としたため、報告の文章を示して分析結果を記述したかったが、大部にわたり困難であったため付録とした。適宜参照頂きたい。ドミニカ共和国国内での調査報告は、雄谷が和訳した。分析は、その翻訳語に基づいて行ったが、基本的にスペイン語そのもの、表現そのものの共通性を基盤に、随時3名で確認しながら作業を行った。

調査結果の分類方法については、調査参加者の作品受容の様相について分類する方法と、作品そのものを対象として、文楽を構成する3要素である言葉、動き、音声などを中心に分類する方法の2種類の分類を行った。前者の分類については、まず、作品受容を肯定的に行った場合、否定的に行った場合の2項目に分類した。また、その結果がどのような様相であるのかについて、作品受容の様相を報告する際、調査参加者が使用した形容

詞的述語部分に着目して、項目ごとによる分類を行なった。分類に際しては、形容詞的述語部分は調査参加者の使用したそのままの形で分類した。なお、本稿においては、品詞について形容詞的述語部分と一括して称したが、実際は、「緊張感があった」といった名詞と動詞からなる短文の形による記載も含んでいる。これらを便宜上「形容詞的述語部分」と包括的に称したのは、次の理由による。調査参加者が、作品受容の様相を述べるとき、形容詞など単独の品詞だけでは説明しきれない部分を他の品詞で補助的に表現することが推測され、そのように使用された語の働きは形容詞による記載内容に準じると考えられるからである。また、サンプルとして取り上げる場合、時制を統一せず、可能な限り報告されたそのままの形で記載した。

次に、文楽の構成要素による分類については、1) 言葉・内容、2) 言葉・語、3) 言葉・表現、4) 動き・演技、5) 動き・舞踏的表現、6) その他の動き、7) 音・浄瑠璃、8) 音・三味線、9) その他の音、についての9項目に分類し、それらに分類されない、もしくは重なって分類される項目の必要にしたがって、10) 演出、11) 視覚を対象として表現されているところ、12) 作品構成、13) 作品評価、を加えた13項目別に分類した。

1から9までは、言葉と動き、音声の3要素からなる文楽の構成要素ごとの分類である。3要素それぞれについて、受容の様相をより詳細に記述できるよう、分割した。言葉は、言葉が伝達している内容と、その伝達が語水準によるものか、表現の水準によるものかによって分割した。また、言葉に準じて動きと音声もそれぞれ3分割した。動きは人形が作品内容を伝達する表現の仕方を演技と舞踏的表現に分割し、さらに、調査参加者の感想報告によく見られた人形遣いなど人形そのもの以外の動きにかかわる項目を付加した。音声も浄瑠璃部分と三味線部分に項目を分割し、それ以外の音の項目を付加した。さらに、同じく調査参加者の報告に多くみられた、演出、視覚に作用する部分(表3, 4では視覚と表記)、作品構成、作

品評価に関する項目を付加した。

分類を記述する際には、国内における調査ならびにドミニカ共和国における調査、それぞれの結果を記述する。

最後に、それらの形容詞的述語部分を、KJ法によってグループ化した。KJ法¹²⁾は、「既存の知識や野外の観察で収集した情報」を整理して、「仮説の発想を導く方法である」。また、情報を整理する過程で、「異質の情報との結合による創造的な発想が導かれるとされる」。今回は、聞き取り調査で得られた質的データから、ランダムに語られた調査参加者の感想を分類・整理することを目的として使用した。

2.1 調査参加者の作品受容の様態に関する分類

国内における調査結果：作品を肯定的に受容した場合、否定的に受容した場合の形容詞的述語部分は表1のとおりであった。

表1に見られるように、参加者たちは、肯定的な形容詞的述語部分を述べた者が多く、13例確認できた。否定的なものは3例確認できた。肯定的な形容詞的述語部分で最も用例が多かったのは、「緊張感があった」で、5例あった。そのほか「よく分かった」「共感した」が3例ずつ、「今の世に

表1 肯定的作品受容ならびに否定的作品受容に見られた形容詞的述語部分(国内)

	肯定的作品受容	サンプル数	否定的作品受容	サンプル数
形容詞的述語部分	面白かった(視覚的)	1	よく分からなかった	7
	よく分かった	3	視覚的に刺激がない	1
	滑稽だった	1	バランスを崩した	1
	緊張感があった	5		
	思いの強さを感じた	1		
	意識して聴いていた	1		
	印象に残った	1		
	切迫感があった	1		
	息遣いが感じられた	1		
	今の世にもあると思った	2		
	目を奪われた	1		
	共感した	3		
	興味があった	2		

もあると思った」「興味があった」が2例ずつで、そのほかは1例ずつであった。否定的述語部分では「よく分からなかった」が7例で、そのほかは1例ずつであった。

ドミニカ共和国における調査結果：作品を肯定的

に受容した場合、否定的に受容した場合の形容詞的述語部分は表2のとおりであった。

表2に見られるように、参加者たちは、肯定的な形容詞的述語部分を述べた者が多く、26例確認できた。否定的なものは15例確認できた。肯定的

表2 肯定的作品受容ならびに否定的作品受容に見られた形容詞的述語部分（ドミニカ共和国）

	肯定的作品受容	サンプル数	否定的作品受容	サンプル数	
形容詞的述語部分	面白い(滑稽) Divertido	4	おかしい(変だ) Quedar ridículo	1	
	おかしい(滑稽) Cómico 文脈から「面白い(滑稽)」と訳し わけた	1	よくない No parecer bien	2	注)「いけない」を含む
	面白い Divertido	8	つまらない Resultar aburrido	1	
	よい Estar bien	2	難しい Difícil	1	
	わるくない No estar mal	1	理解できない No entender	1	
	興味深い Interesante	8	わからない No entender 文脈から「理解できない」と訳し わけた	2	
	美しい Ser hermoso	2	奇妙だ Ser extraño, Ser raro	2	
	きれいだ Ser bonito	4	単調だ Resultar monótono	1	
	好きだ Gustar	9	大変だ Costar trabajo (complicado)	2	
	魅力的だ Ser atractivo	2	退屈だ Ser aburrido (encontrar aburrido)	6	
	印象的だ Ser impresionante	3	あまり好きではない No gustar	4	注)「あまり好みではない」 を含む
	感動的だ Ser conmovedor	3	気が散る Distraer	1	
	天才的だ Genial	1	違和感を持つ(不快感) Molestar	5	注)「不快だ」を含む
	効果的だ Lograr buen efecto	1	「惑う」 Turbarse	1	
	芸術的だ Parecer una obra de arte	1	感動が薄れてしまう Quitar emoción	1	
	光栄だ Sentirse honrado	1			
	巨匠だ Ser maestro de	2			
	完璧だ Perfecto	3			
	驚くべきところだ Ser algo sorprendente	1			
	好奇心を持つ Encontrar curioso	1			

注意を引く Llamar la atención	2			
よく表現されている Expresar bien	4			注)「うまく表現している」「表現している」「表現を達成」を含む
気に入る Gustar 文脈から「好きだ」と訳しわけた	1			
目立つ Ser claro, Ser visible	1			
楽しんだ Disfrutar (Ser entretenido)	3			
一番成功している場面だ Lo mejor logrado	1			

な形容詞的述語部分で最も用例が多かったのは、「好きだ」で9例見られた。次に多いのが「面白い」「興味深い」で、ともに8例であった。続いて、「面白い(滑稽)」「よく表現されている」「きれいだ」がそれぞれ4例ずつ見られた。さらに「印象的だ」「感動的だ」「完璧だ」「楽しんだ」が3例ずつ、「よい」「美しい」「魅力的だ」「巨匠だ」「注意を引く」がそれぞれ2例ずつ確認できた。そのほかは1例ずつであった。また、否定的な形容詞的述語部分では、「退屈だ」が最も多く、6例見られた。続いて、「違和感を持つ(不快感)」が5例確認できた。さらに「あまり好きではない」が4例、「よくない」「わからない」「奇妙だ」「大変だ」が2例ずつ確認できた。そのほかは1例ずつであった。

2.2 作品の構成要素別分析

国内における調査結果

表3に見られるように、調査参加者たちの感想は、「演出」に関して述べているものが最も多く26例確認できた。続いて「動き・演技」に関するものが19例、「言葉・内容」に関するものが15例、「作品構成」に関するものが10例、「視覚に作用する部分」に関するものが9例、「作品評価」に関するものが8例、「ことば・語」に関するものが7例、「言葉・表現」および「音・浄瑠璃」に関するものが6例、「その他の音」に関するものが5例、「音・三味線」に関するものが3例確認できた。

ドミニカ共和国における調査結果

表4に見られるように、文楽の構成要素を基本とした分類において、調査報告者の感想の中で最も多く述べられていることは、「作品評価」に関す

表3 文楽の構成要素を基本とした分類別報告数の比較(国内)

作品構成要素	言葉・内容	言葉・語	言葉・表現	動き・演技	動き・舞踏的表現	その他の動き	音・浄瑠璃	音・三味線	その他の音	演出	視覚	作品構成	作品評価
サンプル数	15	7	6	19	0	0	6	3	5	26	9	10	8

表4 文楽の構成要素を基本とした分類別報告数の比較(ドミニカ共和国)

作品構成要素	言葉・内容	言葉・語	言葉・表現	動き・演技	動き・舞踏的表現	その他の動き	音・浄瑠璃	音・三味線	その他の音	演出	視覚	作品構成	作品評価
サンプル数	8	0	0	16	5	15	16	14	0	16	12	4	22

るもので、22例確認できた。続いて多かったのは、「動き・演技」に関するもの、また、「音・浄瑠璃」に関するもの、さらに、「演出」に関するものがそれぞれ16例確認できた。次に多かったのは、「そのほかの動き」に関する報告で、15例確認できた。続いて、「音・三味線」に関するものが14例、「視覚」に関するものが12例、「言葉・内容」に関するものが8例、「動き・舞踊的表現」に関するものが5例、「作品構成」に関するものが4例であった。「言葉・語」や「言葉・表現」や「その

他の音」に関しては、全く感想が述べられていなかった。

2.3 形容詞的述語部分のグループ化

次に、調査参加者の報告に基づき、形容詞的述語部分を、KJ法によってグループ化した。グループ化は、受容様態の明確化を求めて行った。また、形容詞的述語部分による作品受容の内容（主として鑑賞対象）について、表5を基に報告者の言葉を総括する形で作成した表を文末に

表5 KJ法による形容詞的述語部分の分類

	ラベル	形容詞的述語部分の項目	
肯定的作品受容	滑稽	・滑稽だった	・面白い(滑稽)
	完璧	・光栄だ ・驚くべきところだ ・完璧だ	・天才的だ ・巨匠だ ・よく表現されている
	印象的	・目立つ ・印象に残った	・印象的だ ・効果的だ
	緊張感	・息遣いが感じられた ・緊張感があった	・切迫感があった
	感動的	・感動的だ	・思いの強さを感じた
	魅力的	・きれいだ ・美しい ・注意を引く ・芸術品だ	・魅力的だ ・面白かった(視覚的) ・目を奪われた ・一番成功している場面だ
	共感	・今の世にもあると思った ・よくわかった	・共感した
	好き	・好きだ	・気に入る
	面白い	・良い ・楽しんだ ・好奇心を持つ ・悪くない	・面白い ・興味があった ・興味深い
	予備知識	・意識して聴いていた	
否定的作品受容	違和感	・気が散る ・奇妙だ	・おかしい(変だ) ・違和感を持つ(不快感)
	退屈	・視覚的に刺激がない ・単調だ	・退屈だ
	面白くない	・よくない(「いけない」を含む) ・大変だった ・あまり好きではない(「あまり好みではない」を含む)	・つまらない ・感動が薄れてしまう
	難しい	・難しい ・戸惑う ・よくわからなかった	・理解できない ・わからない

Appendix 5 として付加した。報告者の国が確認できるように、日本人々をS1J, S2Jと表記し、ドミニカの人々をS1, S2と表記した。

作業に際して、「バランスを崩した」は、その内容が主として調査方法への問題提起であったため、全体の受容傾向を見るためには特殊であると判断して、グループ化からは除外した。「意識して聴いていた」に関しては、調査以前、大学の演習において、報告者が心中意識に関連した発表を聞いていたことが、作品鑑賞に影響を及ぼしているサンプルであったので、1サンプルであったが項目とした。

KJ法により、14のグループが抽出され、それぞれラベル付けされた(表5参照)。そのうち、「滑稽」「完璧」「印象的」「緊張感」「感動的」「魅力的」「共感」「好き」「面白い」「予備知識」の10個は肯定的な作品受容に関するものであり、「違和感」「退屈」「面白くない」「難しい」の4個は、否定的な作品受容に関するものであった。

さらに、肯定的または否定的な受容をしているそれぞれの場合、形容詞的述語部分が記述している内容を、Appendix5の項目内容にしたがって纏めると、肯定的な受容の場合では「人形」「演出」「舞台」「浄瑠璃」「三味線」「効果音」「作品内容」「言葉」の8項目に纏められた。分類の性格上除外した項目内容は、「全体の感想」「町人文化形成に関する論文」「心中意識, 男伊達とか意識して聴いた」の3項目内容であった。まとめに際しては、報告内容に「人形」などの明らかな表現が見られるものを、1項目に纏めた。その後、たとえば、「場面(愛人たちの踊り)」などは、人形の舞踊的表現と解釈されるので「人形」に含めた。また、「ジャンルの認知(芝居と朗読そして音楽の総合)」は「総合芸術」と称し、「言葉」に纏めた。報告数は、基本的に一項目内容を報告数1と数えたが、中には、一項目内容に複数の内容を含んでいる場合が若干あり、報告数2と数える場合があった。

調査参加者の報告数が最も多かった報告内容は、「人形」で40個、そのほか、「演出」が17個、「作品内容」が13個で多かった。それら両国間に

おける報告数の比は、「人形」は日本での報告数2に対してドミニカ共和国では38であった。「演出」では6対11、「作品内容」では9対4であった。

一方否定的な受容の場合では、「人形」「演出」「浄瑠璃」「三味線」「効果音」「作品内容」「言葉」の7項目に纏められた。除外したものは、「作品全体」1項目内容であった。否定的な受容では、「舞台」に関する報告がなかった。また、「効果音」と「作品内容」は、報告数1であった。調査参加者の報告数が最も多かったのは、「浄瑠璃」で10個、続いて、「人形」で8個、「三味線」が6個であった。「人形」の報告数が多いが、否定的な受容では「人形」に関するものは、「人形遣い」に関する報告であった。また、「三味線」に関する報告には、「音楽」と記述されたものもあったが、文脈から「三味線」に関する報告に含めた。報告数が多い項目の両国間における報告数の比は、「浄瑠璃」が日本での報告数4に対しドミニカでは6であった。「人形」では0対8、「三味線」では0対6であった。

表6 肯定的または、否定的受容時の報告内容ごとの報告数と2国間の比(日本:ドミニカ共和国)

肯定的受容		否定的受容	
報告内容	報告数	報告内容	報告数
人形	40 (2:38)	人形	8 (0:8)
演出	17 (6:11)	演出	5 (4:1)
舞台	5 (0:5)	舞台	0
浄瑠璃	2 (0:2)	浄瑠璃	10 (4:6)
三味線	6 (1:5)	三味線	6 (0:6)
効果音	4 (4:0)	効果音	1 (1:0)
作品内容	13 (9:4)	作品内容	1 (0:1)
言葉	6 (5:1)	言葉	2 (0:2)

考察

国内での調査結果において、作品に対して肯定的な評価をあらわすと考えられる述語部分のサンプル数が、否定的なそれよりも圧倒的に多かった

のは、調査参加者が、主として大学で日本史を専攻する学生であったため、程度に差はあるものの、文楽が無形文化財である、伝統芸能である、といった知識や、無形文化財や伝統芸能に対するある種の鑑賞パターンが干渉したのではないかと考えられる。

否定的な評価を意味しているとした「バランスを崩した」の項目に関しては、ノートパソコンによる調査の問題点（大夫の声よりも三味線の音が大きく聞こえてしまうために、言葉、音、動きがあざなわれて一つの芸術を作り上げている分、その中の一点が強調されると全体のバランスが崩れてしまう）を述べているので、いわゆる作品受容の否定と考えるのは無理があるが、以下の点を考慮して除外しなかった。昨今では、文楽に触れる機会も、劇場での鑑賞以外に映像を通すなど多様化してきている。その多様化が、作品鑑賞や作品受容に影響を及ぼすことも多いのではないかと考えられるため、鑑賞に使用した機材に関する感想報告も取り上げた。

そのほか、「よく分からなかった」「視覚的に刺激がなかった」の項目で報告されていることは、浄瑠璃の冒頭部分に関することが多く、音曲にのって語られた言葉からその内容を理解することが困難であったことが、否定的に受容された理由であると考えられる。

さらに天満屋を訪れた徳兵衛をお初が裾に入れて隠すことや、二人が火打ち石の音に紛らせて車戸をあけるといった、芝居の趣向としてかつては鑑賞された部分に関して、「ちょっと」といった違和感を持つ感想が見られたのは、現代人である調査参加者が身に付けた合理性や、芝居の趣向について芝居鑑賞によって日常的に知識として身につける機会がなくなりつつあることが影響していると考えられる。現代人である調査参加者には、火打ち石の音の大きさで、車戸の音を紛らすことは難しいのではないかと疑問を持ってしまい、作品を楽しむことができなくなることもあるようだ。こういった点は、「縁の下」に関する報告者の記載にも見られ、「何かいたら、忍者がぶすっと、さし

ちゃったとか、時代劇のイメージもあるので（略）危険なところに隠しちゃって大丈夫なの…」といった、作品鑑賞のための基礎知識が不十分である点がかがわれる。また、現代人が囲まれている過去のイメージは、映画やドラマで作りに上げられたものであり、近松が意図した趣向もその意図とは、異なった形で受容されていることが確認できた。

同じく否定的な作品受容に関するドミニカ共和国での調査結果では、述語部分が15例挙げられているが、概して文化的差異が大きく影響していると思われた。調査に先立って、スペイン語による作品の梗概を一読してもらい内容の基礎知識を持った状態での鑑賞ではあったが、言葉の壁の大きさも否めない。「言葉が理解できなかった」といった報告のほかに、音楽に関するものにも「意味がわかっていれば」といった、音楽表現の意味に関する理解が欠けていることが作品受容に影響していることを報告する調査参加者が見られた。また、自国の文化との違いをその原因として報告するものも多く、「自分が慣れてきたものとは全く違う」「女性の登場人物に女性の声がないのは不快」「人形を操る人が見え違和感」などが見られた。しかし、これらの問題点の中には、慣れによって解消されているものもあり、人形遣い（主として主遣い）などは「人形の動作を見ていると（略）操作をする人や語り手の存在がうすれてしまう」といった報告も見られる。

肯定的評価と考えられる面に関しては、概して、国内の調査参加者が自分自身との関係において作品を鑑賞してその面白さなどを報告しているのに対して、ドミニカ共和国の調査参加者は、視覚的な面の評価や伝統文化であること、芸術であることなどを中心に評価している傾向が見られた。これは言葉の壁や文化の壁がある以上、ある程度否めない結果であると思われる。一方、「最後のシーンで二人が抱き合う場面では、実際に二人がそこにおいて、多くの苦しみを背負い、落胆し、自分たちの悲劇的な決心に身を任せるように見えた」など、『曾根崎心中』の内容に接近する報告も

見られることから、梗概による作品の知識が視覚的な受容と影響し合って深い作品理解に接近していると考えられる報告者も見られた。

両国での肯定的受容ならびに否定的受容の報告内容ごとの報告数とその比を確認した結果から、次のように考えられた。肯定的受容の報告数が多かった「人形」に関して報告数に開きがあるのは、言葉の壁があるドミニカ共和国の人々が、人形の演技など視覚的な面白さに惹かれていることはいうまでもないが、演技から作品を理解しているからであろう。それは「演出」や「作品内容」にも報告が見られたことから窺われる。ただし、「人形」に関して、ドミニカ共和国のみで否定的な報告が見られるのは、先ほども述べたが、人形遣いが見えることへのドミニカ共和国の人々の違和感からの感想であるので、文化の違いが原因であるといえよう。

また、否定的受容の報告数が多かった「浄瑠璃」では、両国間ではほぼ同数の報告数が確認できたが、音曲に接する経験が日本国内でも少なくなり、耳を通して鑑賞することの難しさが窺われた。肯定的受容欄の「言葉」の報告内容が、言葉そのものの面白さを述べるものであったこととも考え合わせると、現代では、日本の人々にとって音曲にのった言葉の理解がいかに難しいかが窺われた。

結

以上の結果と考察を踏まえ、両国間での文楽『曾根崎心中』の受容の差異について一応の見通しを述べたい。まず、言葉そのものの面白さを理解できるか否かの問題や、目に見える人形遣いの存在など文化的慣習に関わる点には、その受容に差異が見られる。しかしながら、人形が表現する物語の面白さや、人情の機微を鑑賞することや、浄瑠璃を聴きとることの困難さや退屈さにはその受容に共通する点が考えられることまでは、今回の調査から少なくとも言及できるのではなかろうか。

一調査結果から、多くを結論付けることはできない。また、調査参加者の感想報告の分析方法に関しても、分析者が報告文を解釈して分析する場合の客観性は、どのように保持されるのであろうか。このような残された問題を今後検討しながら調査を重ね、両国間の文化受容の異同を明らかにしていきたいと考えている。

注

- 1) 2003年11月7日、文楽は、日本では能に続いて、ユネスコにより人類の口承および無形遺産の傑作として登録された。
- 2) 最初の文楽海外公演は、1962年7月、文楽協会の事業として、因会、三和会選抜メンバーによって行われたアメリカ公演であった。2週間の予定で、シアトルで開催されていた21世紀博などで披露した。その後、フランス、オーストラリア、カナダ、ヨーロッパ、中国など10か国以上の国で公演を行っている。
- 3) 「韓国公演で反響を巻き起こした文楽が、今度はドイツの日本文化会館から招待を受け、「素浄瑠璃公演」にでかける。(略)「義太夫節はオペラの演奏を聴くような味わいがある。人形がなくとも大丈夫」とドイツ側から声がかかって踏み切った」(朝日新聞, 2001, 5, 22)。
- 4) 「お初・徳兵衛に「太陽の国」喝采(略)次の瞬間。「ブラボ! ブラボー!」。1階前列から波が広がるように、5層のバルコニー席を含めた全員が立ち上がり、喝采を送る」(朝日新聞, 2002, 11, 6)。
- 5) グアダラハラ市での初日公演では、初日観客が511人、メキシコ市では、観客数が1000人を越えたのは、3公演中で1度だけであったとの記事が見られ、宣伝不足と料金の高さがその原因ではないかとの記述も見られた(朝日新聞, 2002, 11, 6)。
- 6) 2002年9月27日から10月23日まで、ブラジル(ブラジリア、サンパウロ、リオデジャネイロ)、メキシコ(メキシコ・シティ、グアダラハラ、グアナファト)の6都市15回公演で11000人を越える観客数であった。(国際交流基金, イベント報告「文楽中南米公演」2002/9/27~10/23, <http://www.jpff.go.jp/j/culture/perform/oversea>)

/event/others/0211.html)。

- 7) 浄瑠璃のジャンルのうち、現代のホームドラマ的な世話物の一つが、心中ものと呼ばれる作品群であるが、近松作品では世話物24作中11作を数える。『曾根崎心中』に代表されるように、観客には人気があったが、幕府から相対死禁止令が出されるなど社会への負の影響も大きかった。話の結末が途中で終わる壮絶さと恋愛関係の昇華といった甘美さが合わされる世界を、隠微と形容する記事も多い。「現世の復讐より恋人との死を選ぶ、隠微な心中の「美学」が貫く作品だけに、「太陽の国」の観客の反応は未知数だった（朝日新聞、2002、11、9）」。
- 8) 1954年、「ドミニカが移民を受け入れるニュースが新聞に掲載」された。1956年3月、「日本でドミニカ移民の募集が開始される」。7月以降入植がはじまる。1960年、「日本人移民受け入れ中止決定」「資料7 ドミニカ共和国移住史年表」ドミニカ共和国移住50周年記念事業執行委員会『“今、生きてここに在る”「カリブの楽園」哀歎の半世紀』パスコジャパン、2007、pp.64-65。
- 9) 「1950年代半ばに移住された方々が苦難に直面されたことは事実です。その方々が愛しいこのカリブの国に貢献され、日本との関係をさらに強くするのに大変重要な役割を果たされました。今日で

は、移住者の方々がドミニカ人と家族の絆を結び合い定住し力強いドミニカと日本の社会を築いていることを心から誇りに思います」レオネル・フェルナンデス「記念誌発刊に寄せて」ドミニカ共和国移住50周年記念事業執行委員会『“今、生きてここに在る”「カリブの楽園」哀歎の半世紀』パスコジャパン、2007、p.4。

- 10) 日系移住者277戸、849名（注8前掲書による）。
- 11) 「明治41年（1908）に始まり、国策によって推進された。この年ブラジルに向けて783名が笠戸丸に乗り出航している。（略）最盛期は昭和5年（1930）から10年であり、この間に十数万人が渡航している。平成元年（1989）現在では122万人の日系人が各地に定住しているが、移民の大半は主としてサンパウロ州のコーヒー農場で労働に従事した。（略）南米でも特にブラジルへの植民は、北米で日本人移民の制限と禁止が行われたことで、資本家が積極的にこれを奨励し誘致したものである。（略）また、ブラジル社会に同化していく過程で、彼らが日本文化の維持に努めてきたことは特筆に値する」（『国史大辞典』第12巻、吉川弘文館、1991、p.345）。
- 12) KJ法に関する記述のうち、「」内は有斐閣『心理学辞典』からの引用である（『心理学辞典』、有斐閣、2010、pp.213-214）。

Appendix 1 Procedimiento

Los pasos a seguir son los siguientes:

Primero, lea el resumen de la obra.

Segundo, vea la obra. Puede verificar el resumen de la obra mientras lo está viendo así como también puede ir tomando notas.

Tercero, después de ver la obra escriba en el ordenador sus comentarios sobre la parte que encontró interesante, cómica o divertida, así como sobre la parte que encontró aburrida o insípida. Escriba qué parte, de qué manera y por qué lo encontró interesante, cómico o divertido. Proceda hacer lo mismo con la parte aburrida o insípida. Escriba libremente de manera espontánea por 5 minutos.

Appendix 2 Los Amantes Suicidas de Sonezaki

Argumento

Escena Primera

Tokubei, un aprendiz de una tienda de salsa de soja, está enamorado de Ohatsu, una prostituta que trabaja en una casa de citas llamada casa de té Tenmaya.

El dueño de la tienda, impresionado del esfuerzo y trabajo de Tokubei quiere que éste se case con la sobrina de su esposa y desea compartir el derecho de su negocio para que Tokubei pueda inaugurar una tienda. Tokubei intenta rehusar la oferta del dueño. Éste entonces le hace la propuesta a la madrastra, una mujer muy apegada al dinero, quien dá su consentimiento y recibe una dote grande a espaldas de Tokubei.

Al enterarse Tokubei de este acuerdo, lo rechaza con una actitud decidida. El dueño se enfurece al ver que Tokubei elige a una prostituta por encima de su sobrina. Lo despidе de la tienda y le exige que devuelva el dinero.

Tokubei regresa a su aldea y le hace a su madrastra devolver el dinero recibido. Sin embargo no reintegra este dinero al dueño, sino que se lo presta a Kuheiji, un amigo de muchos años, quien le ruega intensamente y promete devolverlo en unos días.

La promesa nunca se cumple y Kuheiji hasta desmiente la existencia de dicha deuda acusándolo de intento de extorsión. Tokubei se da cuenta de que ha sido estafado por Kuheiji. Pierde el dinero, la honra y es golpeado pasando a ser el objeto de reproches.

Escena Segunda

Esa misma noche, Ohatsu encuentra a Tokubei abatido y triste parado en la puerta de la casa de té Tenmaya. Ella lo oculta bajo su kimono y de esa manera Tokubei logra esconderse bajo el balcón. A continuación Kuheiji llega a Tenmaya. Mientras éste se vanagloria de su nueva fortuna y divulga calumnias contra Tokubei de cómo será ejecutado o exiliado y de cómo va a tener entonces a Ohatsu en su posesión, Ohatsu y Tokubei se comunican por medio de sus manos y pies y deciden morir juntos.

Avanzada la noche, los dos juntos de la mano se escapan de la casa de té Tenmaya.

Escena Tercera

Los dos logran llegar al “Bosque de Tenjin” y hallan un árbol simbólico de su amor. Deciden que ése será el sitio elegido para su final.

Atados al árbol con la faja del kimono, la navaja de Tokubei dá con la garganta de Ohatsu. Antes de perderla, Tokubei se corta su propia garganta y los dos mueren juntos.

Appendix 3 曾根崎心中 聞き取り調査：ドミニカ共和国

S1

このビデオはあまり好きではない。日本語の会話が理解できないので、一度に観るのは少し大変だった。

奇妙だと思ったのは、人形の後ろにいる人たちの顔だ。あの真剣な顔には笑ってしまった。あんなに真剣になる必要があるのだろうか。

音楽は自分の好みではない。少し退屈で繰り返しが多い。しかし人形の髪型や衣装そしてまた表現の仕方などはとても魅力的だった。

物語の内容を理解するために、話のあらすじをよむ必要があるという意見に私は賛成できない。人形自体がそれを表現し、伝えたいメッセージを伝えるべきだからだ。言葉が障壁になってはいけないと思う。ジェスチャーで話せばよいことだ。

舞台美術は悪くなかった。照明の使い方は良く、作品の流れがみえた。

この作品は、自分が見慣れてきたものとはまったく異なり、そのため作品に集中することや、理解することがとても大変だった。今まで見てきた人形と違う、大きな人形が登場すること、またこれらの人形の操作の仕方など、とてもおもしろく興味深かった。

音楽は単調で退屈に思えた。しかしもし意味が理解できていたら、もっとおもしろかったかもしれない。語り手の声には違和感（不快）をおぼえた。こちよくなかった。

人形の動き方、表現の仕方、身につけている衣装には驚くべきものがある。人形の後ろにいる人たちに少し違和感（不快）を感じる。気が散ってしまうからだ。しかし彼らはずっと同じ表情で集中している。

舞台装置がもっと面白く、その時代と物語に一致していたらより作品への理解度がますのではないだろうか。

S2

この作品を観たが、好きか嫌いかは断片的にいえない。面白く、ポジティブな面もあればまた退屈な部分、ネガティブな面もあった。

一番面白く興味深かったのは、人形のあの優雅で信じられないくらいのリアルな動きだ。操作する人の、とても高いレベルの訓練と能力に驚かされる。また、人形が、物をそつなくこなしていく様子がおもしろかった。Tokubeiが帽子

をとる場面や、Ohatsuとタバコのパイプ場面などだ。TokubeiがOhatsuのスカートの下に隠れる場面には笑ってしまった。違う意味で語り手の声の音調にも笑ってしまった。

弦楽器が気に入った。音色が好きだ。爪の代わりに使っていた木の一片にも好奇心をもった。すばらしい音をつくりだしている。

この作品のテーマも興味深く感じた。

前にも述べたが、語り手の声の音調に違和感を感じた。女性の登場人物に女性の声がないのは不快だ。女性に男性の声を使うのはかなりおかしい。

ワンシーンに30分もかかる。エピソードがあまりにもゆっくりすぎて退屈だった。きつと言葉が理解できなかった点や、最初にあらすじを読んでしまっていたので、驚きがなかったことなどが一番の原因だと思う。

S3

長い歴史を持つ様々な文化の中には、悲劇的な結末に向かう実り得ない愛が存在する。この作品の登場人物も、あたかも日本人社会に特徴的な結末を象徴するかのようになり、自尊心、苦悩、社会に対する義務に縛られ、自殺の陋路へと導かれて行く。曾根崎心中のあらすじを読み終えたのち、私はこの作品が、あの名作、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」の、人形による日本版のように思えた。

人形たちは、三味線のリズムと完璧に一体化して操られる。また作品は、一人の語り手によって物語られるが、声と音調が瞬時に変化し、複数の登場人物の声と化していく。日本人同士の会話なら、このように一人の語り手が語る手法でも表現できよう。彼らはずっと、互いに話す順番を守り、秩序を重んじるからだ。もしラテン人（西洋人）同士の会話ならこの手法は成り立たない。私たちはきつと人の話を聞かず一斉に話し出し、声を高めて行くだろう。

三味線の音響は、あまり好きになれなかった。なぜだか寂しくなった。理由は分からないが、あまりに高音であるからかもしれない。またあるときは、とても厳粛で悠長だからかもしれない。

過剰な舞台装置や飾り、音楽を特徴とする典型的な西洋の演劇とは異なり、文楽は繊細かつ厳粛な最小限の要素のみで表現する。

Ohatsuの衣装は印象的だ。見事な織り、鮮やかな色彩、特に髪の色はゴージャスなまでに複雑だが、同時に洗練された繊細さも併せ持っている。

人形の動きは完璧だ。私たちは紐で動く人形 Titeres（操り人形、指人形）には馴染みが深いですが、文楽の人形は3人がかりで操っている。当初は舞台上の Omozukai や、助手が気になって人形に集中できなかった。また沢山の人間が舞台上にいるため、非常に圧迫感があった。全員が黒い服装で統一する方が良いのにとさえ思った。しかし後には、彼らはほとんど気にならなくなり、目に入らなくなるほど、人形の存在が大きくなっていった。彼らは完璧に連携して、人形の頭、体、腕、手、足を操った。登場人物は活気にあふれ、泣き、怒り、悲しみ、失望し、そして自尊心を持った。人形は、自らの命を宿した。Omozukaiの顔は感情を全く示さず、徹底的に物事に動じない独特の雰囲気をもたせていた。あたかも感情を顔に出さないとと言われる、日本人の代表であるかのように。しかしその後、彼が人形の頭と、全く同じ動作をしていることに気付いた。まるで、一つの身体のように完璧だった。

日本語がわからない観客は、あらかじめ作品のあらすじを読んでおくことが不可欠だ。その上で会話を想像すればよい。そうすれば、実り得ない愛という点で、共通点を見出すことができる。

人形は大きく、おそらくとても重く思われる。あの完璧に計算され尽くしたように連動する動きは、長い年月の修練が生み出した成果に違いない。

一番リアルな表情や動作は、TokubeiがOhatsuの衣装に隠れて泣いた場面に見られる。音こそ無いが、彼の体や頭の動きから、悲しさにあふれる悲痛な思いが伝わってきた。

Ohatsuは声が甲高い。しかし彼女の身ぶり（ジェスチャー）は、とても感動的だった。特に彼女が自分の足を出し、Tokubeiが触る場面など予想外だった。私の知っている人形は足がないが、この人形は直立した人間のように完璧な動きで歩いている。

他に面白いと思った場面は、Ohatsuが明りを消そうとして転ぶところだ。まるで人間のように見える。また最後のシーンで二人が抱き合う場面では、実際に二人がそこにいて、多くの苦しみを背負い、落胆し、自分たちの悲劇的な決心に身を任せるように見えた。

第三幕も観たいと思った。でも実際にはTokubeiがOhatsuを殺すので、曾根崎の殺人と心中とでもよぶべきではないだろうか。

S4

音楽は奇妙に聞こえる。楽器は初めて見るが美しい。語り手の声は急激に変化する。きつと言葉の表現なのだろう。枯れた声を出すとき、髷め面をするとき、面白い。

どのように座っているのだろうか？ 居心地が悪そうだ。

衣装は繊細で魅力的だ。日本文化の中で一番惹かれる。人形まで複雑だ。長い歴史を持った美術表現に、レスペクトを感じる。

舞台はシンプルかつ実用的に出来ている。3人で一体の人形を操る人々の移動を可能にしている。しかし、人数が多い。その中に一人、真面目な顔をして全く表情を出さない責任者のような人がいる。

語り手の声の変化に戸惑う。しかし、それぞれの音調ははっきりしている。特に、ひやかしの対話はすぐに識別できた。内容は分からないが、語り手の声に笑ってしまったことがある。

人形は頭の動きで、感情を表現しているように思える。もっとも上手く表現されているのは苦しみだ。実際の日本の芸術は苦しみや犠牲と深く結び付いていると思う。いつも悲しみ、懸念し、自分の名誉のためには死すら覚悟しているかのようである。敵対する人物の顔には、悪さがにじみ出ている。

衣装、特に足が芸術品だ。初めて、全身が見える人形を見た。

一番上手に表現されていると思う場面は、主人公が彼女の衣装の下に隠れるところだ。姿を隠してはいるが、この場面の重要な構成要素となっている。彼の表情はくっきりと際立っていた。Ohatsuが足を差し出すシーンや、二人の身ぶりだけでの対話は、天才的演出だと思った。

日本では、名誉と愛情が何よりも大事であると思っていたので、友を裏切る悪人が勝利をおさめる展開には意外性があった。西洋の物語のように、悪者が打ち負かされることを期待した。

脱走する場面の舞台は、とても難しく手が込んでいる。この巨大な人形の複雑な操作技術を、存分に楽しむことができた。彼が彼女を先に、ドアから逃がす場面では、彼のOhatsuに対する特別な思いやりが感じられ、心に残った。

恋人達の別れの踊りは、とても入念に構成されており、動きのあるシーンで一番楽しく観ることが出来た。

最後まで観たいと思ったが、もし観ていたら恐らく長すぎると感じただろう。第二幕は30分も続いた。日本語が解らない私にとっては、退屈だったかもしれない。

S5

音楽は興味深い演劇ではあるが、私の好みではない。

OhatsuとTokubei相互の愛情には感動した。皆に中傷され、Tokubeiは詐欺師の汚名を着せられるが、それを見てもOhatsuの愛情は変わらず、彼を強く信じ続ける。

音楽はこの作品に厳粛さを付与する。しかし私には、語り声同様、単調でつまらないと感じた。一人の語り手ではなく、登場人物ごとに語り手が存在すれば、この作品はもっとバイタリティーを持ったかもしれない。

人形からは深い印象を受けた。とても繊細に作られた髪型、顔、そして衣装はすばらしい。人形に表情はなくてもその明確な動作だけで、私たちは登場人物の悲しみや心配に気付くことができた。人形を操る人々が舞台上にいるため、集中できなかった(彼らが大事な役目を果たしているのだが)。舞台で一番大切な主役は人形であり、それを操る人間ではないはずだ。彼らは全員、黒い服装に統一すべきであり、そうすれば観客は人形だけを鑑賞できるのと思った。

S6

正直に言うと、この作品はあまり好みではない。最初から退屈で、早く終わって欲しいと思った。その理由は、まず音楽があまりにもゆっくり過ぎること、また人形を操る人が舞台上にたくさん居り、人形よりも目立っていたことなどだ。

音楽と、わが国で公演される舞台を比較すると、我が国のものは陽気で楽しい。音楽が様々な楽器で演奏されるからかもしれない。音楽に動きのあるリズムがあるので、たとえ音楽がわからなくても、自然に体が動き出してしまう。

S7

語り手(大夫)や音楽を演奏する人の服、また同様に人形の衣装も好きだった(気に入った)。とてもきれいだった。舞台もきれいだった。主人公はとてもきれいでこの作品の中心人物だと気づいた。

あらかじめあらすじは読んでいたが、作品の糸をたぐっていくのは難しかった。作品の持つリズムや会話部分が全く分からなかったことが原因である。

人形を操る人が気になり、違和感を感じた。全員が黒い服装で揃え目立たなくなるほうがおもしろいのではないかと考えた。芸術的に何らかの意味を持つのもかもしれないが、あまり好きではない。

男の人が女の人のスカートに隠れ、顔をのぞかせ話していた場面はとてもよかった。人形の顔には感情が映ってはいなかったが、人形が手を使って感情を表現する様は好きだ。また、帽子の男の人が入ってきて、その帽子を取った場面はとてもリアルで好きだった。ある場面で一瞬の衝撃があり、何かが舞台に落ちることがあったが、とてもインパクトがあり印象的だった。

音楽はとても奇妙で、自分にはゆっくりすぎると感じた。理解できない。

作品がこれ以上続いていたら退屈していたかもしれない。人形の動きが多い場面では、人形を操る人があまりにも目立ち、時には人形さえもささげり、観客に背を向けてしまい、この作品の感動がうすれてしまった。

S8

この作品を観ることができ、芝居と朗読そして音楽が組み合わさったジャンルを知ることができて、とても光栄だ。しかし、もしあらすじを読んでいなかったら、ストーリーを見失っていただろう。

語り手について：大好きである(うっとりした)。言葉が理解できなくてもこの物語の展開を知ることができた。各登場人物にあわせた声や口調の変化、強調することによって人形-登場人物に活気をふきこんでいる。

三味線をひく演奏者：楽器の口匠だ。この物語や会話が必要とするリズムとテンポ、強調をあたえた。

人形と操作する人：なんとすばらしい技術だろう。この文化について、人間の体、特に顔の特徴、頭、上半身や手足の動きを知り尽くす口匠だ。ヒロインの顔や衣装はとても細かく繊細である一方、他の登場人物は派手さをおさえている。本物の人間のような動きで表現し、観客は彼らのかかえる苦しみ、欺瞞、名誉、愛情、後悔を受け止めた。

面白く興味深かったところ：最後の天満屋から逃げ出す場で、Tokubeiは紳士的でOhatsuを先にドアから逃がすシーンと踊りのシーン。この踊りの場面に沢山の動きや移動があるため、人形を操作する側にとっては一番難しいのではないと思う。

面白かったところ：Ohatsuが自分の衣装にTokubeiを隠す発想。

一番好きだったところ：TokubeiがOhatsuに汚名を着せられたことを打ち明けたとき、Ohatsuは彼を信じ許す場面。

注意をひいたところ：人形を操作する人が、登場人物かのように人形と同じ表情をすること。

この三つのジャンルを使った作品は、三本の足を持つテーブルのように一本ぬけると倒れてしまう。三者はとても上手く連携していく。語り手は声の変化で聞き手を惹きつけ、音楽は登場人物の行動を強調し、人形は登場人物に命をふきこむ。この悲劇作品は、私が知っている西洋の作品にひけを取らない。

S9

聞き取りに参加させてもらって有難う。とても独特な芸術を紹介してもらったと思っている。このような芸術は少しずつ無くなるのかもしれない。

観始めた時は、作品が全くわからず、気取っていて退屈だと感じた。観ていくと、気取ってはいないがやはり退屈に思えた。観終わった時、自分が間違っている点があると気が付いた。私は次のように考えた。人形の顔や手、しとやかで気品のある動作を観ていると、人形に命を与えているはずの操る人や語り手の存在がいつのまにか薄れ、補佐役にまわってしまう。彼ら(操作する人、語り手)は非常に優秀で、これは彼らの持っている技術の高さによるのだろう。

人形の手や顔、衣装、からだの関節の動きなどの完璧な操作を達成するには様々な分野の芸術が含まれていると思う。黒い服装で人形を操っている人の中に、違う格好の人が一人いる。何を意味するかは分からないが、彼が責任者であり、このような仕事にたずさわっている彼らは社会的に尊敬された国民的英雄だったのではないかと推測する。

間違っていることを願うが、このような芸術は未来には無くなっていくのではないかと推測する。

S10

当初二人の人が演奏しながら登場したときは、退屈な作品かと予想したが、意外におもしろく、興味深かった。この場面は弦楽器を弾いている二人の人から始まり、観客を次のシーンへと導いていく。その後Ohatsuと彼女の仲間が登場するが、彼女達はとてもきれいだ。人形の衣装、特に女性の衣装は美しい。舞台美術は簡素だが、適切でエレガントである。

人形を操っている人たちはとても器用だ。目の動きを見ようとしたが巧妙で難しかった。人形にかなりの大きさがあり、複雑な動きを表現するため数人の人間が必要とされる点は興味深く、おもしろい。また黒い服装のおかげで気が散ることもなく、人形の動きに注目できる。

TokubeiとOhatsuが出会うシーン、また二人がおかれている状況がひき起こす、悲しくて切ない情緒を表現するシーンがすきだ。Ohatsuが自分の長い服(着物)にTokubeiを隠し、彼が顔をのぞかせる様子はおかしかった。また彼がOhatsuの足に接吻する様子はやさしく愛情に満ちていた。

人形が、このような多様な人間の気持ちや伝えることができるのが面白く、興味深い。TokubeiとOhatsuのお互いの愛情や、Ohatsuを口説き落とそうとしているKuheijiのずるがしこい性格などもだ。

自殺を覚悟して逃げ出す最後のシーンは感動的だ。ここでは沢山のアクションがあり、最後まで観客の注意を引き付ける。

唯一残念だったのは、言葉が理解できなかったので、この文楽をもっと楽しめなかったことだ。

Appendix 4 曾根崎心中 聞き取り調査：国内

S1J

セリフそのものについては、これと言ってはっとするところは無かった。しかし、逆にその面白みの無いセリフが、正直かなり“くさい”話である曾根崎心中のくさみを打ち消しているように感じた。

目を奪われるのは、話の本筋よりも人形の動きのリアルさ。「足をとってぞ〜」のシーンは特に秀逸に感じたが、顔を見なければ実際の人間が演じているのかと錯覚するほどに生々しい演技だと思う。

それと、コレは見ている最中に思ったことだが、曾根崎心中の内容について、極端に言えば自分があまり面白くないと思うのは、これは、一種江戸時代の昼ドラ的な話だからだと思う。逆に言えば、昼ドラが好きな人々は、なかなか希少な「時代とともに色褪せない昼ドラ」である本作を楽しめるような気がする。

最後に、やっぱり「この、毛虫殿!」で笑ってしまう。なぜなのかは分からないが、大笑いではなく、プツとくる。

S2J

面白かったところ

○九平次が登場して徳兵衛の悪口を散々言い散らすのが、お初がきげんとして「徳様はそんな悪い方じゃありません」と言い返すところ。

(理由) 生活の中で、女性の強さと男性の弱さを常々感じているから。

○最後の場面「かちかち」で緊張感があって面白かった。

面白くなかったところ

○特になし

S3J

面白くなかったところというのでは、特に指摘するところはあまりないんですけど。面白かったところですね。やっぱり終盤にいくにつれて、なんて言うか心中を決意した二人が緊張感ある脱出劇というか、そのところが面白かったですね。あとは、縁の下に徳兵衛が入っていて、他の周りの人もいますから、二人で喋ることも出来ないんですが、初と徳兵衛が肌を触れ合って、心中の覚悟を示したりとか、お互い心中を決意して、涙ぐむ、「しめりしめりて」というところに、二人の思いの強さを感じるというか、そのへんが面白かった。

面白くなかったところは、冒頭の部分がよく分からなかった。

面白かった理由とかは、心中の話ですが、ちょうど、ゼミで、町人文化形成ということで、そういう論文をあつかっていて、その中で人形浄瑠璃とか、浮世物語で表現された心中意識だとか、男だてとか、そういう話があったので、今回も、男の一分はすたつたとか出てきましたが、そういうことを意識して聞いてたので。

初が、心中に行く前のところですが、初は白無垢死にいでたちですか、恋路の闇の白小袖、衣装と心中っていうことで、白と黒の対比っていうのですか。それが面白かったです。

S4J

おもしろかったところは、九平次が、店に来てちょっとしてから、嘘八百を言い散らす・お初がキセルをおとして・死なねばならぬといったことを言って、足首を取って・あそこのシーンは、けっこう印象に残るといえるか。

他には、最後に門からでるところの火打の音があせらせる。そのときに、その門がなかなか開かない。鍵がかかっているんでしょうか。なかなか戸が開かないところが緊張したというか、見つかるかもしれない。

あとは、お初が徳兵衛を隠して縁の下へ行くシーンは、なんとなく最初の方ですけど。

面白くなかったところは、やっぱり映像を見てると、最初の劇が始まるまでのシーンが、あれが、朗々と・・・なんて言ってるのか、正直分からなかったのも、あそこがまあどこが退屈だったかと言われると、そこが。やっぱり、そう、視覚的に、こうなにも刺激がないところという感じですよ。

あの火打石が緊張感というか、切迫感があったなという、あとは、体験とかではないんですけど、いま言った何かのシーンですごい、人形から息遣いと言うのではないですけど、顔は一緒なのに。

目はつぶってますけど。流石に表情はかわらないので、その息遣いまで感じるのは・・・動きのところ面白かったということですが、人形の表現との・・・なんかそういうところの方がセリフも聞けたような、何故か、想像がし易かったからかもしれません。

三味線は刻む早さとかそれで結構わかるなと・・・テンポが速くなると緊張がすすむというか、変わるのでしょうか。面白いです・・・途中で、調弦って言うんですか、するんですか・・・最初弾き始めた時に、一回だけ、ここのこの三つあるここみたいなのを、いじったので・・・僕も一応、弦楽器やっているので、合奏の時にちょっとあれずれてるかと思ったら、演奏の途中で、ちっちゃい音で調弦する・・・

やっぱり一番は、表情のない人形が、動き・感情を感じさせるのがすごいな・・・と、一番というか、シーンとは関

係なくてなんですが。

S5J

面白かったところは、騙される人もいるというところですね。今の世の中にも、やはりそういう人はいるので。

その九平次の極悪人めがたくんだ作業なればという、そのへんは、周到に騙されたと言うところが、やはり、悔しいというのでしょうか、よくわかります。

それで、天満屋の中で、お初もそれへ便乗した毛虫とかいうので、やっぱり、思っていることは一緒なのかな・・・と。思っていることは、悔しいとか憎いとか・・・一緒か・・・そこが面白かったです。

お初がしずんでいるところに、その、同僚の人たちが、いろいろ、その詳しい話までして慰めようとしていますけど・・・そういう人もいるな・・・と。そういうところが面白かったです。

あんまりおもしろくなかったところは、情景描写して言うんですか。一番最初の、恋風に身に・・・ってところとか・・・何を言ってるのかなあって。言葉遊びなのが分かれれば、面白いのかなと思いますけど、ちょっと・・・いきなりちょっと、これは、ビデオで聞いても、理解できない・・・わからない・・・何度も読んだり、聞いたりしてると・・・分かるのかもしれませんが・・・内容は面白いんですけど、ちょっと・・・

その九平次が、天満屋にわざわざ来るわけですが、やっぱりちょっと、自分がやったことが気になるというのは・・・面白かったですね。

あとは、わざわざ忍びできた徳兵衛を、裾に入れてかくまうというのがどうやってする・・・合図は・・・足でつくとか・・・要するに蹴飛ばしてやるわけですから、それもなんか・・・もうちょっとなんかやり方があるかな・・・言葉で言って、十分伝わると思うので。ちょっと伝わりにくいところがあったのではないかと。

心中するということを、目の前で言うわけですね・・・一緒に死にますって・・・九平次の前で・・・一緒に死ぬると言ってしまうので・・・言ってしまったあと、一生懸命抜け出すところというのは、面白いなと思いました。

皆、起きてしまって逃げるのにげられない・・・火打石の音に合わせて、扉を開けるといふ。ちょっと、それは、本当、火打石の音で紛れるのかなって、思ったりとか・・・どんな音がわからない、あれはね・・・そこは、ちょっと想像がつかないので、どうか・・・で、見ていたところですよ。

その、一緒に死ぬっていつてから、ずっと徳兵衛が待っているというのが・・・待ってたんだと・・・すぐに死んでくれると思うのかなと思った・・・ちょっと・・・その目にすぐ一緒に死んでしまうというのも、なかなか凄いな・・・と・・・理解できないかもしれません。

S6J

面白かったというか興味があったところは、徳兵衛が縁の下にいてお初が隠していて、そこに九平次が来て・・・こうこうこんなことがあったんだという話をしていたときに、お初がすぐく下を向き加減の感じでいたのを見ていて、自分の好きな人が、本当にやったこともあるのかもしれませんが、こんな風に言われている、それをずっと聞いている、すぐつらいだろうな、私だったら、これは耐えられないだろうなと思って、その場面は、じっとほんとにお初はどんな気分で聞いていたんだろう。すぐその表情とかに目がいつてしまったという感じはありました。

あと面白かったというか、九平次が、まあ、かわいがってやるよみたいなことを言ったときは、このやろうみたいな感じ、なんなんだっていう風に、私も、もしそんなことを言われたら、はん？なんなんだって思ってしまうのでその部分は面白いというか、お初と同じような気持ちになっていたのかなって思いました。

あとは、火打石がかんかんとなっていて、一番最後のシーンです。今のはなんじゃ、女子どもって、亭主の声が聞こえたときに、きっと生きた心地しなかったんだろうな、早く逃げたいだろうな、私も逃げたいと思いながら、その部分は共感したというか、早く逃げてって、もう走って逃げてもいいから早く逃げてという風に見ていました。

面白くなかったというか、あまり関心なかった部分というのは、あまりなかったんですけど・・・うん？となった部分は、縁の下に徳兵衛を入れちゃうのが・・・どっかに隠しておけばいいのになって・・・ちょっと、あれを入れてしまわなければ、まだ・・・縁の下か・・・何かいたら、忍者がぶすつとさしちゃったとか、時代劇のイメージもあるので、もし、何か音がたったら、見つかって、もう、危険なところに隠しちゃって大丈夫なの・・・っていうのは、私が現代人だからですかね。そういう風に思ってしまう。ストーリーとしては、ここに見えるようにっていうのもあったのかなとは思いますが、そんな風に見ていました。

先ほどもちょっと言いましたが、自分が好きな人で、もう、そんな人にこんなこと言われて、私はもう言いたいことあっても、声を大にしても言えないしという葛藤も、きっと、お初にはあったんだろうな・・・って思っていたので、逃げ切るまでの間は、観客としても、はらはらしてしまう、早く逃げてという風に思ってしまう。私は非常に興味深く見ていました。

音楽・・・三味線とかの音が大きくて、大夫さんにかぶって、ききずらいところがあったので、ようこう画面を見

つつ、耳もこうやってるんですけど・・・なかなかこはこう言ってるのかな、どうかな・・・聞き取りにくいと感じるときもあります。ノートパソコンですと音が上にしか出ない・・・ちょっと難しいかもしれません。すごくいい場面になると、バーンって音がなるので、ちょっと抑えて・・・って思ってしまう。言葉と絵、というか、場面と音楽が合わさって、一つのスタイルになるというのは、分かるのですが、何かが強くなってしまうとちょっと、バランスが・・・って感じてしまった部分が、私はありますね。自分が演劇をやっていたので、それで、場面、舞台を見るっていうのが気になったのかも・・・。

S7J

九平次が、あの・・・とか、お初を・・・あ、反論として・・・いきいて・・・生きてるうちにも・・・そこが面白い。

他は、セリフではないんですが、最後のお玉が火打をこうしているうちにカチカチ、そこどころが一番・・・

その、面白くなかったところ・・・九平次がやってきて、退出する、お初の語り・・・

人間関係・・・お玉がこう・・・あそのシーン・・・生活というか・・・。

S8J

面白かったところから、九平次ですか・・・とお初が・・・一番、言葉で言うと・・・お初の言葉を聞いて・・・徳兵衛が泣いているところ。

あとは最後ですね。徳兵衛とお初が・・・二人は手を取り合い。

面白くなかったところは、話の展開上、当たり前のことかもしれませんが、初めのあたり、恋風…新色街と・・・他にはないです。

理由

面白くないところー動きが少ない。ひたすら歌っている感じが・・・それが理由ですね。面白かったところー三人の関係があまり詳しく分からないのですが、徳兵衛の存在に九平次はまだ気づいていないところが、スリリング性がある・・・徳兵衛が泣いているところが共感できるというか、演出も徳兵衛がお初の着物に隠れている演出も面白かったところが理由です。これもまあ、徳兵衛、二人で逃げて火打のおとが・・・二人手を取り合って、二人は死ぬんですかね。・・・心中・・・嬉しいというところ・・・ですよね。動きが一番激しいところ・・・が理由です。

S9J

面白かったところ

まずは、最初の方で徳兵衛がくるシーンですか。ちらと見るより飛び立つばかり、その部分。

最後の二人で逃げる部分なんですけど、本当に最後の戸を開けると、二人手を取り合い・・・下女はひうちを・・・丁と打てばそっと開け・・・。

つまらないところ

初は涙にくれながら・・・ところから、軒下に隠したというか、男と二人でやり取りするシーンはあまり・・・。

面白かった理由

お初と他の芸者というか、とのやり取りもあって、初めは気持ちが一番現われるんだけど、うまく、走り出たいけれど、出れないというところが共感できる、そのもどかしいというか、そういうところが理解できるなというか、今でもそういうことはあるだろうなという、ちょっと共感できるなど。

最後のところ

二人で逃げると言う時に、すごく緊張感というか、ばれないように見つからないように逃げるという緊張感があるんだけど、その火打ちの音と合わせて戸を開けると細かいところが見て面白かったと感じました。

面白くなかったところ

初は涙にくれ・・・気持ちの面では、何となく初めは気持ちが分からなくはないですけど、遊女としては客と心がつかうか、商売ではなくて、感情が先走ってしまうと言うのは、どうしても、ちょっと、気持ちでは分かるけど、共感できるかっていうのが、恋愛をしたとしても、その先がないっていうか、すごく気持ちは分かるんだけど、現実的にどうしても見てしまうとちょっと・・・。

人形を見て、その感情が伝わってくるというか、すごく細かい、キセルを取り扱ったりとかいろんなシーンが細かくて、そういうのを見ていて、こう人形とはいえリアリティがあるなっていう風におもったので、それは作品には入り易かったと思いました

声色もすごく変わっていたので、九平次がすごく嫌な感じというか、意地悪な感じがしたので、すごくそれも・・・三味線は非常に気持ちとリンクしていたというか、見ててこちらで逃げるシーンとかで、どきどきするなって思ったところで三味線の音とかが強く激しく入るので、こちらの心情とシンクロしてすごく（共感・・・）。

S10J

セリフのところは比較的意味が取り易いところが多いのでおもしろい・・枕になるあたりで・・・地の文っていうか、状況っていうか言葉が入ってきにくくて、意味がとりにくくて面白いと感じにくい、最初の恋風・・・文章で読むと言葉遊びっていうか、次にかかっていくところが見えていくのだろうけれど、言葉で聞くと良く分からない。ここは何を言っているのかなと考えるだけで終わってしまっている・・・面白いとは感じにくいかなと。

九平次が退出していた。(たが白川の高肝)とかも人形の動きと話している内容が違っていると、意味がとりにくいというか、わたしはちょっと分からなかった。

セリフは状況とか感情とか伝わってくる。比較的聞き取り易い言葉が多いのかなと、感じます。全般として、状況とか捉えやすいので、面白いと感じ易いところはあります。人形の動きとセリフとがすごくマッチしているところというか、徳兵衛がやって来ると言う時に夜の編みかさを付けてやってくるのですが、初は走って出ちゃいけない。気はせけど人目の関のうたてなやというあたりは、人形の方も初が身を乗り出して、行きたいんだけど行けないというところを表現していて、言葉は初の感情とかを説明しているので、すごく我慢しているのだなということが伝わってきます。そこは、人形の動きと併せてみるとすごく面白いし、感情が伝わってくる。また、徳兵衛に初が寄って行って、傘の内に顔さしいれて、初の感情を、そういうあたりで説明しているなど分かって面白いなど・・・。

全体は声の使い方が、がらっと変わるあたりとか、九平次がやってくると、ガラガラ声になるとか、悪役が来たなって感じ、全体へ雰囲気パッと変わるというのはすごい。

人形と言葉とがマッチしている点では、自害をすると、徳兵衛が初の足をとって喉元にこすりつけるところは、人形の姿だけではよく分からないですが、言葉が入ることによってこういう気持ちでこういう行動をしているんだとわかって面白かったです。

最後の部分で、徳兵衛とお初が逃げ出すあたりで、比較的ここは、言葉が少なく、どちらかという人形の動きで伝える部分が結構あると思うのですが、三味線ですごくときどきして切羽詰まっているというか、効果音と人形の動きというあたりも、すごくつたわってくるなど、緊張した場面ということなんです。

Appendix 5 KJ法による形容詞的述語部分の分類を基にした調査報告者ごとの項目内容表

	ラベル	形容詞的述語部分の報告者ごとの項目内容	
背 定 的 作 品 受 容	滑稽	・面白い(滑稽) S1 人形遣いの顔 S2 演出(徳兵衛がお初の着物に隠れる) 浄瑠璃(声の音調) S4 演出(徳兵衛がお初の着物に隠れる)	
		・完壁だ S3 人形の動き 人形遣い(主遣い) S9 人形の動き(諸分野の芸術が存在)	
		・天才的だ S4 人形・演技(足や身振りでの会話)	
		・巨匠だ S8 演奏者(三味線) 人形遣い	
	印象的	・印象的だ S3 お初の衣装 S5 人形(髪型, 顔, 衣装) S7 演出(お初が転げる)	
		・効果的だ S7 演出(お初が転げる)	
	緊張感	・緊張感があった S2J その他の音, 火打ちのカチカチ S3J 内容・二人の脱出劇	
			・滑稽だった S1J 台詞
			・よく表現されている S4 人形(表現・苦しみと悪事) S8 人形遣い(技術の達成)
			・光栄だ S8 ジャンルの認知(芝居と朗読そして音楽の総合)
		・目立つ S4 徳兵衛の表情	
		・印象に残った S4J 演出(心中決意)	
		・切迫感があった S4J その他の音(火打石)	

緊張感	S4 J その他の音 (火打ち) 演出 (なかなか戸があかない) 三味線 (刻む早さ, 早いテンポ)	・息遣いの感じられた S4 J 人形の動き (息遣い)
感動的	・感動的だ S3 人形・演技 (心中決意の足) S5 お初と徳兵衛の互いの愛情 S10 場面 (自殺覚悟の逃亡)	・思いの強さを感じた S3 J 演出 (縁の下の心中決意)
魅力的	・魅力的だ S1 人形 (髪型, 衣装, 表現) S4 衣装 ・美しい S4 楽器 S10 人形 (衣装, 舞台美術) ・面白かった (視覚的) S3 J 言葉による色彩対比 (闇の白小袖) 視覚的対比 (衣装と心中) 白と黒の対比	・注意を引く S3 人形遣い (主遣い) S8 人形遣い (表情) ・芸術品だ S4 人形 (衣装, 靴) 演出 (徳兵衛がお初の着物に隠れる) ・きれいだ S7 演奏者や人形の衣装, 舞台, 主人公 S10 彼女達 (人形のことか: 分析者注)
共感	・共感した S5 J 作品の人物設定・ 初と同僚の無神経さ 作品の人物設定・ 悪事を確認する九平次 S6 J 台詞 (九平次の台詞に対する, お初の怒り) その他の音 (火打ち) 演出 (徳兵衛を弁護できないもどかしさ)	・目を奪われた S1 J 人形・リアルな動き ・今の世にもあると思った S5 J 作品の人物設定・騙される人の存在 作品の人物設定・初と同僚の無神経さ ・よく分かった S5 J 作品の葛藤設定 (周到に騙された) 作品の葛藤設定 (やはり悔しい) 作品の葛藤設定 (お初の悔しさ) 作品の人物設定・初と同僚の無神経さ
好き	・気に入る S2 弦楽器	・すきだ S2 弦楽器 S4 文化 (人形, 美術表現) S7 衣装 (演奏者, 人形) 人形・演技 (手で感情表現) 演出 (帽子を取るリアルな場面) S8 浄瑠璃 (うっとり) 作品の内容 (徳兵衛の話を お初が信じ許す場面) S10 演出・演技 (徳兵衛とお初の悲しい状況の表現)
面白い	・面白い S1 人形 (大きい, 操作) S3 人形の演技 (お初がころぶ場面) 同 (最後二人が抱き合う場面, 悲劇的決心の受容) S8 人形・演技 (徳兵衛は紳士にお初優先) 人形・演技, 演出 (徳兵衛がお初の着物に隠れる) S10 全体の感想 人形遣い 人形・演技 (表現・愛情や嫌な性格) ・よい S1 舞台美術 照明 S7 演出 (徳兵衛がお初の着物に隠れる)	・興味深い S1 人形 (大きい, 操作) S2 人形遣い (優雅でリアルな動きの達成) 作品のテーマ S8 人形・演技 (徳兵衛は紳士にお初優先) S10 全体の感想 人形遣い 人形・演技 (表現・愛情や嫌な性格) ・楽しんだ S4 演出 (脱走の場面) 人形・演技, 人形遣い 場面 (愛人たちの別れの踊り)

	予備知識	<ul style="list-style-type: none"> ・好奇心を持つ S2 三味線の撥 ・意識して聴いた S3J 町人文化形成に関する論文 心中意識, 男伊達とか意識して聴いた 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味があった S6J 演出(徳兵衛への悲劇を耐える初・徳兵衛) 演出(徳兵衛を弁護できないもどかしさ)
否定的作品受容	違和感	<ul style="list-style-type: none"> ・違和感を持つ(不快感) S1 浄瑠璃・声 人形遣い S2 浄瑠璃(声の音調) 女性の声がない S7 人形遣いの存在 ・奇妙だ S4 音楽 S7 音楽 	<ul style="list-style-type: none"> ・おかしい(変だ) S2 女性に男の声を使う ・気が散る S5 人形遣いの存在
	退屈	<ul style="list-style-type: none"> ・退屈だ S1 音楽(繰り返しが多い, 単調) S2 演出(ゆっくりすぎる) S6 作品全体 音楽(ゆっくり) 人形遣い(目立ちすぎ) S9 作品全体(最初見始め) 	<ul style="list-style-type: none"> ・単調だ S5 音楽 ・視覚的に刺激がない S4J 浄瑠璃(冒頭の部分)
	面白くない	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり好きではない S1 作品全体 S2 三味線の音響 S5 作品全体 S7 人形遣いの存在 ・感動が薄れてしまう S7 人形遣いの存在 	<ul style="list-style-type: none"> ・よくない S1 物語の理解のために話の梗概が必要なこと ・つまらない S5 音楽
	難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・よく分からなかった S3J 浄瑠璃(冒頭の部分) S4J 映像を見ていると, 最初の劇が始まるまで S5J 浄瑠璃(冒頭部分) 演出(徳兵衛を鞆に入れてかくまう) 演出(心中決意) その他の音(火打石) 演出(心中決意と実行の速さ) S6J 演出(縁の下のイメージの違い・時代劇の影響) ・理解できない S7 音楽 	<ul style="list-style-type: none"> ・わからない S4 浄瑠璃・声 S7 作品のリズムと会話部分 ・j迷惑 S4 浄瑠璃(声の変化) ・難しい S7 作品の内容理解

注1) 形容詞的述語部分に関する表1ならびに表3では, 報告者の文章ごとにサンプル数をカウントした。そのため, 項目内容の数と一致しない部分若干出たことを断る。

注2) S1からS10は, ドミニカ共和国での報告者を意味し, S1JからS6Jは, 日本国内での報告者を意味する。

注3) 本文中に掲載したKJ法による分類表と, 本表は形容詞的述語部分の提示の順番が異なっているが, 報告数の関係によるものである。